トピックス

世界最初の心理学研究室開設から130年を迎えるにあたって

高砂美樹

1　はじめに

2009年にライプツィヒ大学は開学600周年を迎える。一方，心理学史の世界では2009年は同大学に世界で最初の心理学研究室が開設されてから130周年ということになっている。1879年にライプツィヒ大学にヴィルヘルム・ヴント（Wilhelm Wundt）が世界で最初の心理学実験室を開いた，と一般に言われているためである。実際には1879年に開設されたのは実験室という特殊な設備ではなく，実験機器を用いるゼミナールが導入されたにすぎない。また研究室あるいはインスティトゥートInstitutとしてはまだ私的なもので，大学が正式に認めるまでさらに数年を要したのであるが，とにかく哲学の講座に実験機器を使用した近代心理学を導入したというのがヴントの功績であることは疑いない。

それから130年近くたった2008年夏，ベルリンで第29回国際心理学会議が開催されたのを好機と思い，筆者は日本人心理学者一行とともにライプツィヒ大学の心理学研究室の一角を訪れた。心理学実験室開設100周年を記念して1979年に設置されたというヴント記念室自体は，ヴントが最初に実験室を開いた建物からは離れてしまい，ヴントの肖像画や使用していた机は残されているものの，当時のもので戦災を免れて残っている機材や蔵書は思ったほど多くはなかった。私たちに記念室の説明をしてくれたヴォントラ（Wontorra）氏も「あなた方のほうがよく知っているでしょう」と言っていたが，確かにヴントの残した蔵書について言うならば，幸いにも戦災を免れた「ヴント文庫」（後述）が東北大学にあるので，日本人のほうがヴントの所蔵品について馴染みがあるといえるのかもしれない。

しかしながら，21世紀になってますます心理学がグローバル化し，アメリカ中心の実践的な心理学が主流となっていく流れのなかで，近代心理学の父としてのヴントはしだいにその名前を教えられなくなる可能性がある。上述の国際心理学会議で筆者がヴントと日本の関係について発表した折に，韓国の若い心理学者から「ヴントとは誰か」という質問をされたのも象徴的なできごとであった。ヴントの名前が意味をもたなくなった現代心理学において，ドイツの心理学の流れはどのような意味をもつのか。ここではヴントから始まるドイツ心理学の歴史について概観してみたい。

2　近代心理学の始まりとヴント

そもそも「心理学」という日本語の用語は，西周（にし　あまね）がmental philosophyを「心理上の哲学」と訳し，かつ省略して心理学と呼んだことから始まっており，明治初期の産物である(1)。ヴント以降の実験的心理学いわゆる新心理学（それまでの哲学的心理学と区別するために，アメリカの心理学者を中心にnew psychologyという呼称が19世紀後半に用いられた）のことが日本の学者に知られるようになったのは1880年代のことである。

一方，ドイツ語のPsychologieは18世紀後半から19世紀初めにかけてはSeelenkundeと共に用いられていたが，次第に使用の比重を増してきて，ついにはヘルバルト（Johann Friedrich Herbart）の『科学としての心理学』（1824–25）(2)のように，著作の表題に用いられるようになった。これら教育学寄りの哲学者たちによって論じられていた心理学は，19世紀半ばからフェヒナー（Gustav Theodor Fechner）など哲学寄りの自然科学者たちによって，研究分野としての新しい心理学へと移し変えられていく。ヴントが1874年にチューリッヒ大学の哲学講座の教授として招聘されたのは，前年に前半だけ出版された著作『生理学的心理学綱要』（1873–74）(3)が契機であるが，その表題は新しい心理学の基盤が自然科学的な方法論にあることを如実に物語っていた。

ヴントは1832年８月16日にドイツの南西部にあるネッカラウという町に生まれた。父親は教区の牧師であったが，母方の伯父たちが医者であったことから，ヴント自身も医学に興味を持つようになり，1856年にハイデルベルク大学で医学博士号を取得した。このあと１学期間だけベルリン大学のヨハネス・ミュラー（Johannes Müller）の生理学研究室に行き，デュボワ＝レイモン（Emil du Bois-Reymond）の筋肉の伸展に関する研究を手伝ったが，当時，ベルリン大学のこの研究室は実験生理学の最前線でもあった。1857年にハイデルベルク大学に戻って教授資格Habilitationを得たヴントは，翌1858年からは生理学講座の教授として招聘されたヘルムホルツ（Hermann von Helmholtz）の助手として５年間働いた。視覚や聴覚などのすぐれた研究書を残したヘルムホルツが感覚・知覚の分野を扱いながらも心理学に興味を持たなかったのとは対照的に，ヴントのほうは錯視のような心理学的テーマに強く関心

（１）　西川泰夫「日本の『心理学史』への導入」西川泰夫／高砂美樹編『心理学史』（放送大学教育振興会，2005年），16－34頁参照のこと。西周自身はオランダ語のpsychologieや英語のpsychologyのことは「性理学」と訳し分けていた。

（２）　Johann Friedrich Herbart, *Psychologie als Wissenschaft: Neu gegründet auf Erfahrung, Metaphysik und Mathematik*, Königsberg: August Wilhelm Unzer, 1825.

（３）　Wilhelm Wundt, *Grundzüge der physiologischen Psychologie*, Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1874.

をもつようになっていったことは興味深い。

ヴントと心理学教育との接点は彼が30代になろうとする時期に訪れた。1856年から医学部の学生も心理学と精神医学の講義をとることが必須となり，哲学講座の教授がこれを教えていたが，1862年に歴史を専門とするツェラー（Eduard Zeller）が哲学講座を担当するようになると，彼はこの講義を私講師のヴントにもまかせるようになったのである。ヴントは1862年から1873年の25学期の間に，「自然科学からみた心理学」「心理学（精神病の研究を含む）」「生理学的心理学」など心理学に関する講義を12回行っていた(4)。

1年間のスイス生活を経たのち，1875年にヴントはライプツィヒ大学に移り，哲学講座の教授として実験機器を用いた心理学研究に着手した。「世界で最初の心理学実験室」云々のくだりは割り引いて考えるとしても，心理学の教育に実験機器を持ち込んだことは画期的であり，この新しい心理学研究室にはアメリカ，イギリス，ロシア，イタリア，日本などから次々と人々が訪れた。その様子から俗にライプツィヒ詣などと称されたりもしたが，単に人々が見学に訪れるだけではなく，例えばアメリカ人のキャテル（James McKeen Cattell）のように，ヴントのもとでPh.D.を取得したのちに帰国してペンシルヴァニア大学に心理学研究室を開く者もおり，19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米を中心に実験設備を備えた新しいタイプの心理学講座が拡大していった。

日本からもライプツィヒ大学に留学して学位を取得したり短期間訪れて聴講したりした者は数多くいたが，心理学の研究によってヴントのもとで学位を取得したり，ヴントが編纂していた雑誌『哲学研究』（1881年発刊。雑誌名には哲学研究とあるが，内容は心理学の研究論文ばかりである）に論文を掲載したりした者は皆無である。日本における最初の心理学関連の講座は1893年帝国大学文科大学に設置された「心理学・倫理学・論理学」の2講座で，そのうち第1講座の初代教授であった元良勇次郎（もとら　ゆうじろう）は日本人最初の本格的な心理学者であった（第2講座の教授は倫理学者の中島力造である）。元良はアメリカのジョンズ・ホプキンズ大学でPh.D.を取得したが，その指導教授のスタンリー・ホール（Granville Stanley Hall）は開設されたばかりのヴントの心理学研究室で実験のてほどきを受けた1人であった。その意味では，間接的ではあるが日本の心理学もドイツの心理学の影響下にあった。ちなみに日本で最初の心理学実験室は1903（明治36）年に東京帝国大学に開設されたもので，翌年になると心理学で卒業論文を書くための規定が整えられ，事実上，哲学科に心理学専修課程が設置されることとなった。

このようにドイツで芽吹いた新しい心理学は19世紀終盤から世界各地で発展して

（4） Solomon Diamond, „Wundt before Leipzig“, Robert W. Rieber（ed.）, *Wilhelm Wundt and the Making of a Scientific Psychology*, New York: Plenum Press, 1980, pp. 3–70.

いくが，哲学の講座にあって哲学プロパーの学者と教授のイスをめぐって争わなくてはならないドイツと異なり，大学の数が拡張していて，かつ比較的自由に心理学の講座を設けることができたアメリカにおける心理学者数の増加は著しかった。1892年に創設されたアメリカ心理学会は，国独自の心理学会としては世界で最初に作られた組織であったが，一方，ドイツで同様の学会が設立されたのはそれから10年以上も遅れた1904年のことであった。それでも19世紀末から20世紀初頭のドイツ心理学界にはさまざまな学派が形成されており，ある意味で華やかな時代であった。ヴントのライプツィヒ学派に対して，作用心理学 Aktpsychologie を提唱したブレンターノ（Franz Brentano）がおり，そのブレンターノの影響を受けてオーストリアで始まったグラーツ学派と呼ばれるゲシュタルト心理学の思弁的な一派は，のちにベルリン／フランクフルト学派と呼ばれたヴェルトハイマー（Max Wertheimer）らの実験的なゲシュタルト心理学へとつながっていく。

こうしたドイツ心理学の展開は，戦争によってやや足踏み状態となった。第１次世界大戦直後に在外研究員に任命された心理学者の千葉胤成（ちば　たねなり）は，「ドイツは敗戦国となったので，もう駄目だろうということで，当時の留学生の大部分はアメリカにおもむいたようである」(5)と記している。千葉自身はこんなことでドイツ人がへこたれるはずはないという思いからライプツィヒを中心としてドイツに滞在したが，結果的にこの滞在によって，ヴントの所有した書籍や文献を集めた「ヴント文庫」(6)を新しく講座の主任教授として赴任する先となっていた東北帝国大学のために購入することができた。いかに第一次世界大戦後の急激なインフレの折であったとはいえ，近代心理学の主要な創始者の１人であるヴントの残した多くの書籍を手に入れることができたということは，日本の心理学にとっては僥倖であったことだろう。1920年代の目録には6,762冊の書籍と9,098冊の別刷（私的な小冊子を含む）と記載されているが，実際の書籍の数は3,000冊余りとみられている。ヴント文庫が現在も仙台市の東北大学附属図書館に保管されているということは，海外の心理学者にはあまり知られていない。因みに，ヴントの曾孫の１人は現在も日本に暮らしており，ヴントと日本の間には意外につながりがあるといえる。

3　２度の戦争とドイツ心理学

第一次世界大戦における敗戦はドイツにおける心理学の発展に水を差すものであったかもしれないが，それでも第二次世界大戦のときのダメージほどひどくはな

（5）　千葉胤成『千葉胤成著作集』４巻（協同出版，1972年），190頁。
（6）　Miki Takasuna, “The Wundt Collection in Japan”, Robert W. Rieber/David K. Robinson (eds.), *Wilhelm Wundt in History: The Making of a Scientific Psychology*, New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers, 2001, pp. 251–260.

かったことだろう。1933年当初の心理学講座はドイツ全部で15大学にあったが，このうち40%にあたる6人の教授がナチス政権下においてユダヤ人の血縁であることを理由に大学から追放されたり亡命を余儀なくされたりした。これらの人々の中には，ゲシュタルト心理学者のヴェルトハイマーや知能や証言の研究で知られるシュテルン（William Stern）といった著名なユダヤ人心理学者たちが含まれていたが，このほかにもナチス政権が大学に介入してくることを嫌がったケーラー（Wolfgang Köhler）や若手のユダヤ人研究者のレヴィン（Kurt Lewin）などのゲシュタルト心理学者がアメリカに亡命した。特にレヴィンがアメリカ亡命後に集団力学という新しい分野を開拓したことを含め，社会心理学など知覚以外の心理学の領域にも後々まで多大な影響を与えたことはよく知られている。もっとも，1930年代以降の日本でゲシュタルト心理学の人気が高かったのとは対照的に，アメリカにおけるゲシュタルト心理学の影響はそれほどでもなく，若手のレヴィン以外にアメリカに亡命したゲシュタルト心理学者の多くは亡命先で弟子を持つこともなく終わったのであるが。

こうした著名な心理学者の亡命や精神分析の発禁について知られているために，「ドイツの心理学はナチス時代に衰退した」というイメージが持たれやすい(7)。だが，これはもしかしたら偏った見方に過ぎないのかもしれない。というのも，第2次世界大戦中の1941年にドイツでは心理学の国家資格試験規程が導入され，それまではただの卒業学位にすぎなかった心理学士 Diplom-Psychologe を認定心理士に格上げすることで，国家試験に合格すれば公務員として軍で兵士の選抜試験における心理検査などの業務に携わる道が開けたのである。これらの資格には大学で一定の心理学の単位を得ることが必要であり，その資格試験規程を満たすために，各大学における心理学の講座数は増えこそすれ，減ることはなかった。陸軍や海軍に所属する心理学者の数も増え，実践的分野も含む心理学界全体からみれば心理学者数はむしろ大きく増加していたのである。

なお，こういうまとめかたをすると，ナチス時代に心理学者たちが政府に迎合していたかのような印象を与えるかもしれないが，それよりも心理学者が自分たちの専門領域の重要性を認めてもらおうと努力していた時代だったと理解するほうが実情に近いと思われる。心理学の内部には依然として，アカデミックな研究領域を重視する者たちと社会に対する実践的貢献を主張する者たちとの間で議論が続いていた。科学としての心理学が社会に貢献するためには，それが専門職として認められる必要があり，Diplom の格上げは実はこうした社会的な承認を反映したものだったといえる。また，こうした戦時中に心理学者が適性検査等の要員で配置される例

（7） Helmut E. Lück, *Geschichte der Psychologie. Strömungen, Schulen, Entwicklungen*, 3. Aufl., Stuttgart: W. Kohlhammer, 2002, S. 13–16. 心理学史における誤った評価の一例として論じられている。

はすでに第一次世界大戦時のアメリカに見られており，心理学という実践的分野の拡大が社会情勢と呼応していたことをよく表している。

ドイツの心理学史研究者のゴイター（Ulfried Geuter）(8)によれば，1970年代までのドイツ心理学界は第二次世界大戦中のドイツ心理学の展開に関してずっと口を閉ざす傾向にあったという。ナチス政権が心理学という専門領域を抑え込もうとか迫害すらしていたと考えるほうが気が楽だったであろうことも理解できる。しかしながら，近代心理学の出発点としてよく引き合いに出される1879年からちょうど100年を迎える頃から，若い世代を中心として反省的に自国の心理学史を見直す作業が進むようになった。ナチス時代の心理学の再考はその象徴でもある。ドイツの心理学者ではないがユダヤ人でウィーンの精神科医であるフロイト（Sigmund Freud）はイギリスにかろうじて亡命できたものの，彼の姉妹たちはアウシュヴィッツで亡くなったことや，精神分析の著作の多くがナチス政権下で禁書扱いになったこと，先にふれた著名なゲシュタルト心理学者たちの亡命や，あるいは人種の優劣に関係した心理学の研究が行われていたことなどがイメージとして先行するあまり，制度として心理学が発展していたことにあまり思い至らなかったであろうことは想像に難くない。しかし，イメージとは対照的に，助成金の額などをみてもこの時期の心理学は決して衰退していなかったのである。

ただし，戦後のドイツ心理学は日本と同様にアメリカの行動主義の影響下にあった。戦前からあるDiplom制度は改訂されながらもそのまま東西ドイツで残り，大学で心理学を学んだ者はこのDiplomを唯一の資格として，学校や企業などさまざまな領域で心理学の専門家として業務につくことができた。アメリカでは1960年代から70年代にかけて，各州で心理療法士に免許を交付するようになったが，ドイツではこうした資格の実現は遅れ，ようやく1999年１月から心理療法士法Psychotherapeutengesetzが施行されるに至った。この法律によって臨床心理学者の一部である心理療法士が国家資格化し，特定の心理療法·Psychotherapieについては医療保険がカバーできるようになったほか，今までは医者の指示のもとに行われていた心理療法（医学の世界では同じドイツ語のPsychotherapieを精神療法と呼ぶ）が独立して開業できることとなった。日本では同様の国家資格はまだ無いので，ドイツにおける動きは日本の心理学における国家資格を考えるうえで参考になるだろう。ただし，ドイツにおいては基盤となるDiplom-Psychologeが先に整備されてい

（８） Ulfried Geuter, “Psychologie im Nationalsozialismus”, Helmut E. Lück/Rudolf Miller/ Wolfgang Rechtien（Hrsg.）, *Geschichte der Psychologie. Ein Handbuch in Schlüsselbegriffen*, München-Wien-Baltimore : Urban & Schwarzenberg, 1984, S. 22–28. 同じ著者による *Die Professionalisierung der deutschen Psychologie im Nationalsozialismus*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1984はこの主題の集大成ともいうべき力作である。

て，その上に心理療法士の資格を作ったのに対して，日本の場合は大学院修士課程以上を必要とする臨床心理士（協会認定資格）だけが先行しており，まだ問題は山積している状態だといえる。

4　ドイツ心理学史と今後の課題

ドイツの心理学の歴史は，心理学全体の歴史においてどのような意味をもつのだろうか。まず言えることは，現代の心理学のルーツを形作ったのはドイツだということである。どんなに21世紀現在の心理学がアメリカ主流であろうとも，ドイツという触媒なしには今の心理学は生まれなかった。

近代心理学の成立を考える際の枠組みとしては，経験主義的哲学という素材に，生理学的手法と進化論的見方という調味料を加えて料理したものと考えるとわかりやすい。ヴントの『生理学的心理学綱要』(1874) が衝撃的だったのは，自然科学的な知見を見事に含んでいるからであるが，それには生理学者としての自身の体験を含め，先駆となるフェヒナーやロッツェ(Rudolf Hermann Lotze) などのドイツ語文献が存在していたことが大きい。ヴントのこの著作に影響を受けて，ラッド (George T. Ladd) の『生理学的心理学要説』(1887)[9]やジェームズ (William James) の『心理学原理』(1890)[10]などが次々とアメリカでも出版されるようになったが，当時のアメリカ心理学界がドイツの影響を受けずに独自に新心理学を切り開くことができたかどうかは大いに疑わしい。

ドイツ心理学史の重要な貢献の側面の１つは，歴史記述の方法論とも関連がある。現在の優勢な観点を枠組として単純に過去に投影する現在主義 Präsentismus の手法が科学史の分野で批判されるようになったのは1960年代後半からであるが，心理学史においても1970年代後半になるまでは，現在の視点から無自覚に歴史をまとめることが多かった。これは敗戦を体験したドイツよりもアメリカの心理学史において顕著であり，アメリカの場合は，学問史の発展の連続性が強調されてしまい，歴史的に不正確な過去の記述も長い間放置されてきた。対照的に，ドイツでは敗戦によってその時代の歴史記述の正当化をしばらくためらったことで，結果的に，資料に基づいてできるだけ過去の視点から忠実に再構成しようとする歴史主義 Historizismus が比較的容易に受け入れられたといえる。1980年にライプツィヒ（当時は東ドイツ）で第20回国際心理学会議が開催されるのを契機として，1970年代末から心理学の100年間の歩みを見直そうとする著作や企画が相次いだ。『ヴィルヘルム・

(9)　George T. Ladd, *Elements of Physiological Psychology*, New York: Charles Scribner's Sons, 1887.

(10)　William James, *The Principles of Psychology,* 2 vols., New York: Henry Holt, 1890.

ヴントと科学的心理学の形成』(1980)[11]や『ヴント研究』(1980)[12]もそうした本の1冊にあたり，過去にさまざまに歪曲されたり誇張されたりしたヴント像を再考するのが狙いであった。

1980年代以降に認められる心理学史記述の新しい傾向のもう1つの側面は，外部主義 Externalismus を用いたアプローチにある。このアプローチは学問の内部から学問史を構成しようとする内部主義 Internalismus と対比されるもので，教育制度や社会制度，文化や宗教などの学問分野の外にあって影響を及ぼす要因から学問史を分析しようとする。例えば，ナチス政権下での心理学に対する政策は結果的に心理学の専門職業化を推進したというのがゴイターの一連の研究の結果であるが，これは外部主義を採用したことによって得られた大きな成果である。また，より最近の傾向としてはグローバル化した一元的な心理学史に対する反省から，さまざまな文化的・社会制度的差異を反映した多次元的な心理学史が見直されており，欧米中心の歴史からの脱却も試みられている。

その一方で，現在の EU 統合の時代にあって，ドイツの心理学界は他の欧州各国と足並みを揃えるべく学士（3年間）／修士（2年間）制度の導入を始めている。それに対応するための新しいカリキュラムの素案をベルリン自由大学で見せてもらったが，今まで6，7年間かけていたものを5年間に短縮して振り分けるために，日本の大学よりもずっと中身の詰まったもので，時間の多さも半端ではなかった。加えて，上述の心理療法士の国家試験受験に必要な教育時間は4,200時間以上と規定されており，2時間1コマに置き換えるならば通年のコマ数は70コマ必要という計算になる。これだけの高密度の内容を保つためには，ある程度切り捨てられる授業も出てくることになり，心理学史が切り捨てられる授業に含まれるケースは決して少なくない。研究機関としてはマックス・プランク研究所の科学史部門に心理学史の研究者がいるものの，肝腎の大学では心理学史の研究者は独自の部門を失っていることがドイツ心理学会の名簿からもわかる。

アメリカ的な実証的・実践的な分野が重宝される風潮にあって，Diplom-Psychologe を心理学教育の共通の基盤として発展させてきたドイツ。今後は欧州の統一性と自国の独自性をどのように並行して活かしていくのかを見守ってみたい。

---

(11) Robert W. Rieber (ed.), *Wilhelm Wundt and the Making of a Scientific Psychology*, New York: Plenum Press, 1980.

(12) Wolfgang G. Bringmann/Ryan D. Tweney (eds.), *Wundt Studies: A Centennial Collection*, Toronto: C. J. Hogrefe, 1980.